

北東ペテン地域における「エントラダ」の影響と終焉

－ホルムルとラ・スフリカーヤ－

佐藤 孝裕

1、はじめに

低地南部マヤ地域では、先古典期中期（前1000年～前400年）になると、北部ペテンPeténのミラドルMirador盆地¹のナクベNakbeを嚆矢として、巨大な建築コンプレックスを擁する都市が出現する。続く先古典期後期（前400年～後250年）には、ミラドル盆地外でも、パシオンPasión川流域のセイバルSeibal、北部ベリーズのノフムルNohmul、セロスCerros、ラマナイLamanai、リオ・ベックRio Bec地方のベカンBecan、北東ペテンのシバルCivalなどで大規模な都市が現れる（図1）（Estrada-Belli 2011 : 52）。中でも巨大な規模を誇ったのが、ナクベと同じミラドル盆地内で、ナクベの北西12kmに位置するエル・ミラドルEl Miradorである。ここには15もの建築コンプレックスがあり、最大のダンタDanta・コンプレックスのピラミッドは73mもの高さに達した。

紀元後100年を過ぎた頃からエル・ミラドルを始めとするミラドル盆地の都市は衰退し始め、その後100年ほどのうちに放棄されてしまう（Estrada-Belli 2011 : 64-65, 120）。逆に、その頃から成長し始めたのがティカルTikalであり、向後低地南部マヤ地域において中心的役割を果たすことになる。このことは、古典期前期前半の碑文が刻まれたモニュメントのある都市の分布が、いずれもティカルから近距離にあることから窺える（Estrada-Belli 2011 : 122）。

ところが、この古典期マヤ地域の中核であったティカルで、4世紀後半に政変が出来る。しかも、この事変はティカルにとどまらず、他の初期国家の誕生にも関連していたようである。この一大事変は、その重大さゆえか、ティカル以外の都市でも記録された。本稿では、古典期マヤ社会の政治的動向を反映する一事例でもあるホルムルHolmulーラ・スフリカーヤLa Suficayaに焦点を当て、この政変が周辺に及ぼした影響を探って見たい。

2、「エントラダ」とは

マヤ長期暦8.17.1.4.12 11エップEb 15マックMak（378年1月13日）に、シフヤフ・カフクSihyaj Kahkなる人物がティカルに到着する。いわゆる「エントラダEntrada」（Martin and Grube 2008 : 29）あるいは「11エップEb事件」（Stuart 2000 : 472）の発端である。この「到着」を意味する語「フ

¹ グアテマラのペテン地方北部、メキシコとの国境に接する逆三角形を呈する面積2200km²の地域。エル・ミラドルやナクベなど、先古典期の都市が多く点在し、これらは政治・経済・社会的に結びついていた（Estrada-Belli 2011 : 50; Hansen and Guenter 2005 : 60）。

ル hul」は、マヤ社会では新王朝の樹立に際して用いられることがある²。事実ティカルでは、それを示唆するような出来事が起こる。先ず、到着の同日にティカルのアハウajaw³であるチャック・トック・イチャークChak Tok Ich'aak I世が死去する。翌年、8.17.2.16.17 5カーバンKaban 10ヤシュキンYaxk'in (379年9月10日)ヤシュ・ヌーン・アヒーンYax Nuun Ahiinがシフヤフ・カフクの後援を受けて即位する。こうしてティカルでは新体制が確立されるのである。

同様の事件は、低地南部マヤ地域の南東の主要国家であったコパンCopánでも生じている。ここでは、「エントラダ」の約50年後にペテン地方出身のキニチ・ヤシュ・クック・モK'inich Yax K'uk' Mo' が武力侵攻し、8.19.10.10.17 5カーバン15ヤシュキン (426年9月3日)に新王朝を開いた(佐藤 2005)。これ以降、マヤ低地南部社会にメキシコ中央高原のテオティワカンTeotihuacanとの関連を窺わせる様々な文化要素が出現し始める。具体的には、石碑等の石造モニュメントや建築物、土器に刻まれた文字テキストや図像、及びタルー=タブレロTalud-tablero様式建築、パチューカPachuca産緑色黒曜石製製品、薄手オレンジ土器や円筒型三脚土器などがその例として挙げられる。

このように、古典期前期の中頃には、低地南部マヤ社会にメキシコ中央高原の勢力と関連する何らかの事変が進行している⁴。その先駆けとなったのがティカルであったため、ティカルの周辺ではいち早く影響が現れている。その一例と考えられるのが、ホルムルからラ・スフリカーヤへの政権の移動である。

3、ホルムルーラ・スフリカーヤにおける「エントラダ」の余波とその終焉

グアテマラの北東ペテン地域に、ホルムルという遺跡がある(図1)。ベリーズとの国境近く、同名の川を見下ろす峰上に位置している。北東4kmほどのところには、この地域で最も重要な都市であったシバルがある。居住は前1000年から後1040年までと、二千年の長きにわたるが、その前半とりわけ後200年頃までは、地域の中核的都市シバルの二次的センターであったと見られている(Estrada-Belli and Tokovinine 2016 : 150-151)。ティカルの東35km、ナランホの北19kmと(Estrada-Belli, et al. 2009 : 232)、徒歩で1~2日で到達できる範囲に大都市が存在する(Marcus 1983 : 464)。このことは、ホルムルの政治的立場を左右する大きな影響を及ぼすことになる。

それを如実に物語るのが、ホルムルの中心部から1.2kmほど離れ、ホルムルを見渡せる峰の上に立地しているラ・スフリカーヤで見つかった碑文と壁画である(図2)(Tokovinine 2008 : 295)。奇妙なことに、ホルムルでは先古典期中期に人々が住み始めたにもかかわらず、古典期前期には彫

² もっとも、hulの意味をこのように限定的に解釈すべきでないとは私はかつて論じたことがある。この点については佐藤(2004 : 33-34)参照。

³ 古典期マヤ社会の国家で、最高の支配者の称号。王に相当。

⁴ この現象については、テオティワカンがマヤ地域を軍力で征服したという説から、逆にマヤ人が文化的に優越していたテオティワカンの権威を自発的に利用しただけで、テオティワカンの直接的関与はなかったとする説まで、様々な議論が戦わされていて、いまだに決着を見ていない。私自身も、テオティワカンの関与は間接的であったとする立場から、自説を発表している(佐藤 2004、2005)



図1 マヤ地域（Estrada-Belli 2011 : Figure 1.2より）

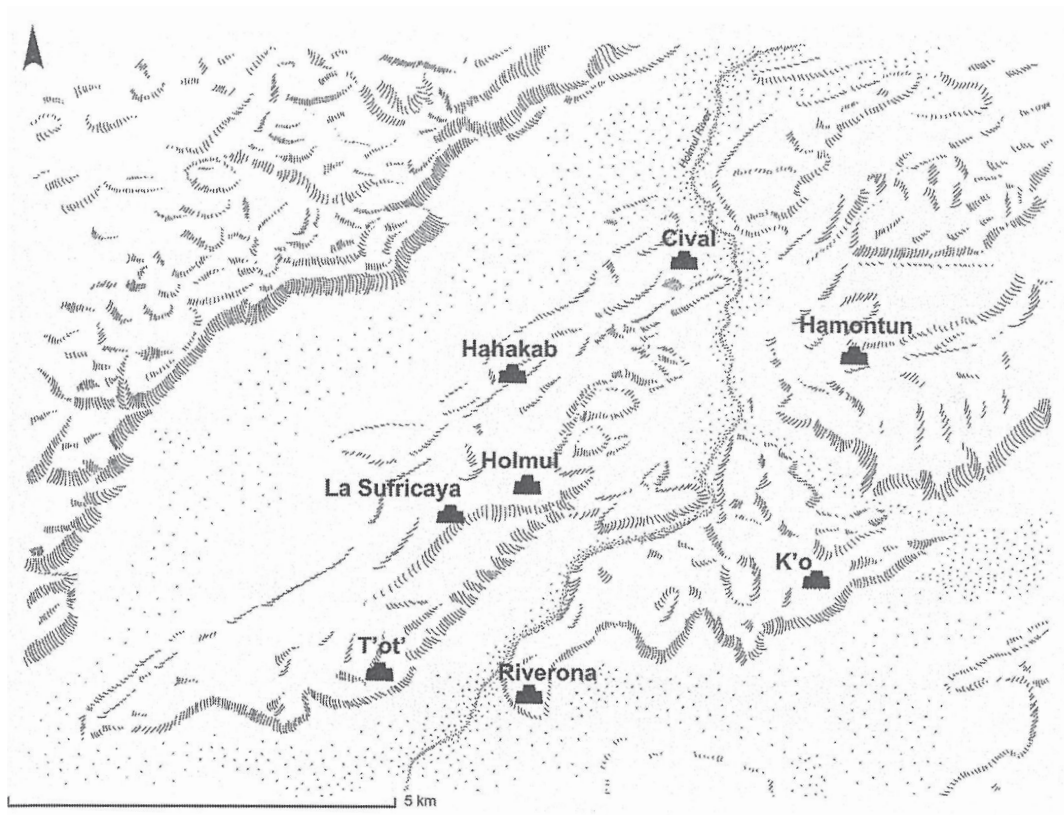


図2 ホルムルーラ・スフリカーヤ周辺図 (Tokovinine and Estrada-Belli 2015 : FIGURE 7.2より)

刻が施されたモニュメントが建立されていない（Tokovinine 2008 : 302）。その空白を埋めるかのよう、古典期前期の4世紀終わり頃からおよそ百年間活発な活動が行われた場所がラ・スフリカーヤなのである。

人々がこの地に住み始めるのは先古典期中期に遡るのだが、古典期以前の建築物は現在までのところ発見されていない（Tokovinine 2008 : 299 ; Tokovinine and Estrada-Belli 2015 : 198）。シバルが200年頃略奪を受けた後、広場や球技場を伴う王宮が建設された（Estrada-Belli 2011 : 134; Estrada-Belli and Tokovinine 2016 : 150-151）。中でも重要なのが、南広場の南西隅にある建造物1である。この建築物は、部屋の間取りや建築技術の点でホルムルの宮殿と異なるだけでなく、作りが粗雑でいかにも急ごしらえされたかの様相を呈している（Foley 2007 : 12-13）。この建物にはいくつもの壁画が描かれているのだが、最も重要なのが文字のみが描かれた壁画7である（図3）。碑文には、建築物1が奉納された日がカレンダー・ラウンドで記されている。260日暦の日は剥落して判読できないのだが、365日暦の日が14マックであることから、この日付は8.17.24.16 11キップ Kib 14マック（379年1月14日）であろうと推測されている（Tokovinine 2008 : 320）。これは、シフヤフ・カフクがティカルに到着した1年と1日後である。しかも、碑文の終わりの方で、「カウィール K'awiil がムタル Mutal に379年1月16日に到着したと記されている」（Estrada-Belli, et al. 2009 : 245; Foley 2007 : 10-12）。ムタルはティカル王国の正式名称であり、そのティカルの石碑31でシフヤフ・カフクがオチキン Och'kin・カウィール（東のカウィール）の称号を伴って言及されていることから（Stuart 2000 : 478）、時期的な整合性も考慮に入れると、この場合のカウィールがシフヤフ・カフクを指すことは明らかである。碑文内容からは、シフヤフ・カフク本人が奉納に立ち会った可能性すら指摘されている（Tokovinine 2008 : 300）。すなわち、シフヤフ・カフクによって樹立されたペテン地方の新しい政治体制を記念するモニュメントとして、この建物が建設されたというわけである。

碑文によると、この建物を奉納したのはチャック・トック・ワヤブ chak tok wayaab という称号を有した人物である（Tokovinine 2008 : 320）。この称号はウスマシタ Usumacinta 川流域で後に一般的になるのだが、王族に授与されるものではない（Estrada-Belli 2011 : 136; Tokovinine 2008 : 300-301; Tokovinine and Estrada-Belli 2015 : 203-204）。古典期の東ペテンで、ラ・スフリカーヤ以外でこの称号を持つ人物が言及されるのは、ホルムルだけである。従って、ホルムルーラ・スフリカーヤの支配者は、アハウのランクに属していなかったことになる。もっとも、石碑1に刻まれた肖像がラ・スフリカーヤの支配者のものだとすると、明らかにマヤ風の豪華な衣装をまとい、右手に「道化神 Jester God」／「鳥の主神 Principal Bird Deity」⁵の冠を高く掲げた姿で表されている点や、空中には神あるいは祖先が浮遊していることから判断して、同時代の他の国家のアハウの

⁵ 「道化神」は、中世ヨーロッパの宮廷道化師がかぶっていた三つの突起に分かれた帽子のような頭部を持つ神で、とりわけ古典期マヤの王の頭飾りの装飾に用いられた（Miller and Taube 1993 : 104-105）。「鳥の主神」は、鳥あるいは蛇の属性を持ち、長い鼻あるいは垂れ下がる嘴を有する神像で、王権のシンボリック的存在（Estrada-Belli 2011 : 86、90、100、101-102）。

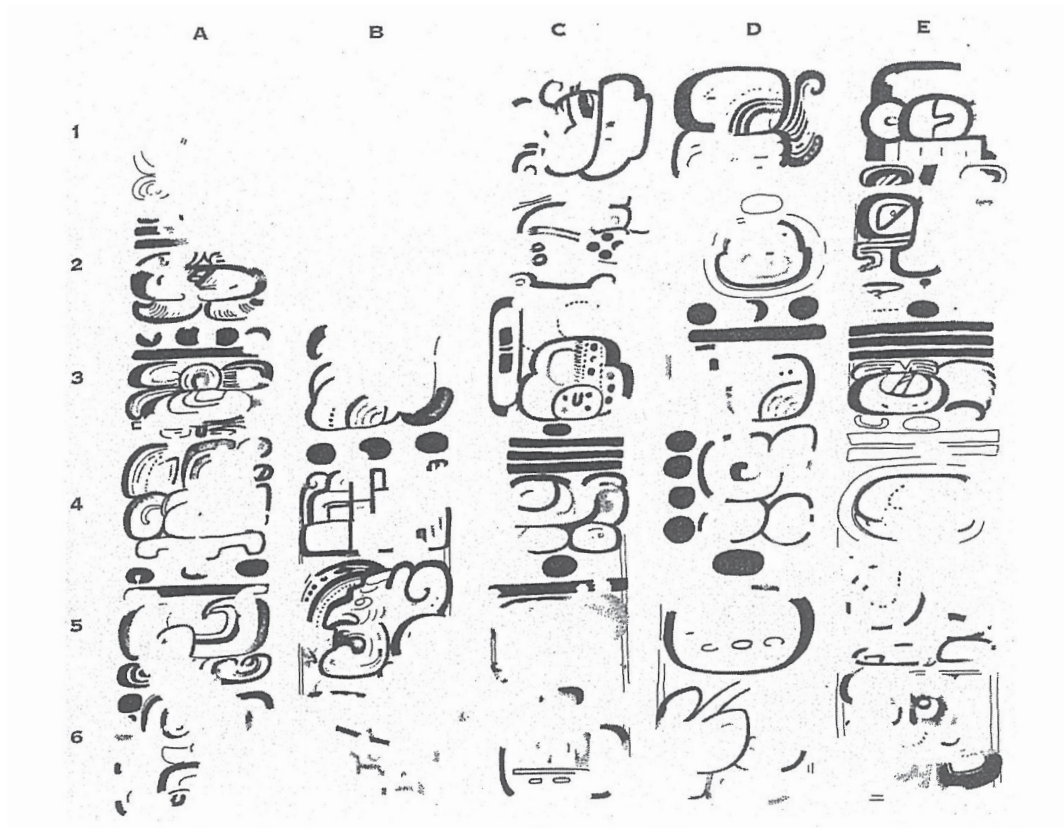


図3 ラ・スフリカーヤの壁画7 (Tokovinine and Estrada-Belli 2015 : FIGURE 7.6より)

姿と遜色ないと思われる（図4）。事実、この肖像に関しては、ティカルの石碑31（445年建立）（図5）や石碑40（468年建立）（図6）を始めとする北東ペテンの9バクトゥンBaktun以前（435年より前）の石碑と様式上の類似性が指摘されている（Estrada-Belli, et al. 2009 : 202; Tokovinine 2008 : 327; Tokovinine and Estrada-Belli 2015 : 202）。

壁画7より少し遅れて建立されたと見られるのが石碑6である。ここには、シフヤフ・カフクの名と、恐らくは377年から387年の間に入ると思われる8.17.?.9.9の日付が刻まれていることから（Estrada-Belli, et al. 2009 : 233 ;Estrada-Belli 2011 : 136-138; Tokovinine 2008 : 300）、碑文の内容はシフヤフ・カフクのティカル到着に関するものと推測される。

テオティワカン戦士風の装いをした人物の存在を視覚的に示唆しているのが、壁画1 - 2、3、6である。壁画1 - 2（図7）には、立ち姿のマヤの貴族96人とテオティワカン戦士風の25人の座った人物が、上下に数段にわたって向き合うような形で描かれている（Estrada-Belli 2011 : 135; Tokovinine 2008 : 336; Tokovinine and Estrada-Belli 2015 : 208、212）。

ところが、500年前後頃にラ・スフリカーヤは唐突に放棄される。宮殿は埋められ、全てのモニュメントは破壊され、遺跡中にまき散らされるのである（Estrada-Belli, et al. 2009 : 252-254; Estrada-Belli and Tokovinine 2016 : 151; Tokovinine 2008 : 302; Tokovinine and Estrada-Belli 2015 : 200）。その後、政治の中心はホルムルに戻る。ラ・スフリカーヤの活動は、わずか百年ほどで終焉するのである。

4、ホルムルーラ・スフリカーヤ間の政権移動の背景

本稿では、ホルムルとラ・スフリカーヤを一括して扱っている。わずか1.2kmしか離れていない両者を、別の政体の所在地とは考えられないからである。1.2kmという距離は、コパンにおける中心部と貴族の居住地区ラス・セプトゥーラスLas Sepulturas間の距離とほぼ同じである。都市間の距離は、カラクムル周辺では平均28.7km、北東ペテンでは15.8km、キンタナ・ロー州南部では大都市間が26kmで小都市間が13kmである（Marcus 1983 : 463-464）。低地南部マヤ地域での一日の歩行距離が23～26km、半日が13～16kmと推測されていることを考えても、ホルムルとラ・スフリカーヤを別個の都市と考えるのには無理がある。

この両者の関係を、同一政体内の勢力争いという観点から解釈する説がある。すなわち、ティカルと結びついた勢力が4世紀半ばに政権を握り、ラ・スフリカーヤを中心に権力を行使したが、5世紀半ばに反ティカル勢力に敗れ、それに伴ってラ・スフリカーヤが破壊され、政権の中心もホルムルに移ったというのである（Estrada-Belli, et al. 2009 : 251-254; Tokovinine and Estrada-Belli 2015 : 205）。先に、コパンにおけるラス・セプトゥーラス地区を距離の観点から類似した事例として挙げたが、政権とのかかわりという点でも類似性を指摘できる。と言うのも、王宮に近接したこの地区に居住していたのはコパン王国の高位貴族であり、しかも彼らは王国の末期には臣下でありながら王に等しい振舞いをしていたことが建築物から読み取れるからである（Martin and

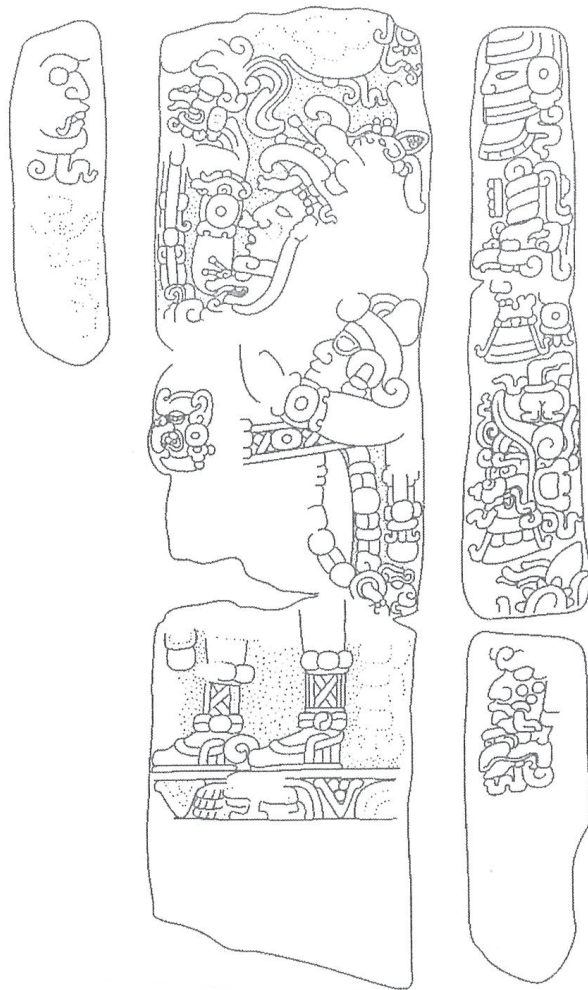


図4 ラ・スフリカーヤの壁画1の正面と両側面
(Tokovinine and Estrada-Belli 2015 : FIGURE 7.7より)



図5 ティカルの石碑31の正面と両側面（Stuart 2000 Fig. 15.2より）

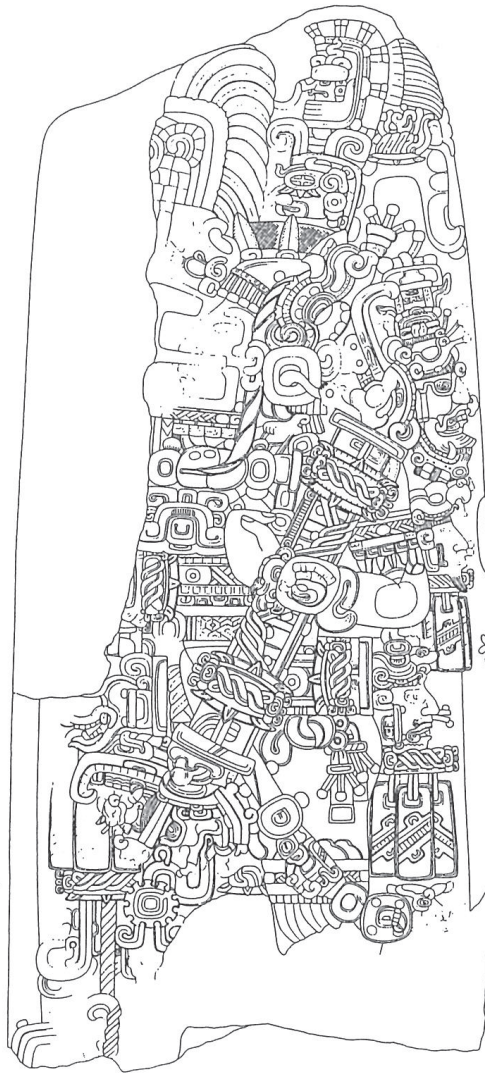


図6 ティカルの石碑40 (Harrison 1999 53より)

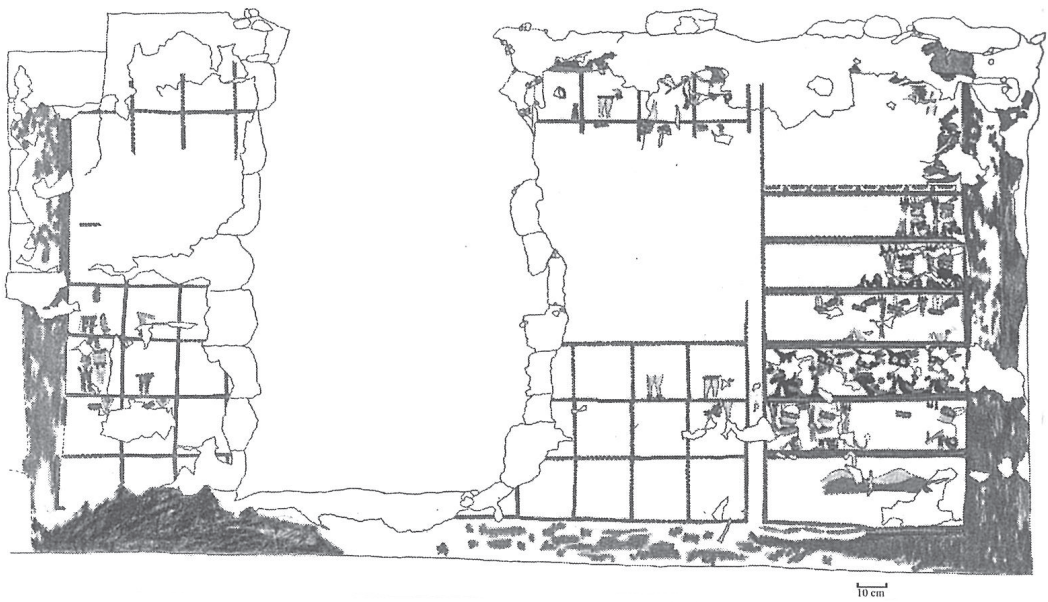


図7 ラ・スフリカーヤの壁画1-2 (Estrada-Belli 2015 : *Figure 6.11* より)

Grube 2008 : 210-211)。同一都市内に競合する勢力が存在し、その盛衰の結果が痕跡に残されていることは珍しくない。

では、ラ・スフリカーヤの建設とその放棄はどのような意味があったのであろうか。この問題を考えるためには、ホルムルーラ・スフリカーヤを取り巻く状況、とりわけティカルを巡る政情に注意を向ける必要がある。建造物 1 の壁画のテキストや図像から推し量ると、ラ・スフリカーヤの建設自体がティカルにおける「エントラダ」と密接に関連していたと考えられるからであり、従ってラ・スフリカーヤの置かれた立場もティカルの浮沈に左右された可能性があるからである。

ラ・スフリカーヤが権力の所在地だった時期は、ティカルでは「エントラダ」によってヤシュ・ヌーン・アヒーン 1 世が王位に即き、続いてシフヤフ・チャン・カウィール Sihyaj Chan K'awil 2 世、そしてカン・チタム K'an Chitam が治めていた頃である。「エントラダ」で即位したヤシュ・ヌーン・アヒーン 1 世が刻まれた石碑 4 の肖像を見ると、明らかにテオティワカンの戦士を想起させる装いで表現されている (図 8)。ところが、その子であるシフヤフ・チャン・カウィール 2 世が建立した石碑 31 では、両脇に立つ父のヤシュ・ヌーン・アヒーン 1 世は依然としてテオティワカン戦士風の装いをしているが、中央の彼自身は典型的にマヤ的な装いと姿勢で表されている (図 5)。外来のテオティワカンの影響を脱しマヤ的伝統に戻る傾向は、彼の子のカン・チタムが刻まれた石碑 40 でも確認できる。すなわち、ここでも彼はマヤ的な衣装に身を飾り、「エントラダ」以前のマヤのモニュメントで定型的だったポーズをとっている (図 6)。ティカルでは「エントラダ」による政権確立当初はテオティワカンの要素が濃かったものの、その後着実にマヤ性に回帰していく。つまり、王の肖像を見てみると、二つの異なる伝統の相克が窺えるのである。同時期のラ・スフリカーヤの壁画にも、マヤ的要素とテオティワカンの要素の混在が見て取れる。このように、この時期のティカルとラ・スフリカーヤは同様の状況を共有しているものであり、両者の緊密な関係性が推測されるのである。ところが、ラ・スフリカーヤが放棄される頃、ティカルを取り巻く情勢が変化し始める。

近年、ホルムルの建造物 A で発見された 593 年頃製作されたフリーズには、この建物がカーン Kaan 王国の臣下であるナランホ Naranjo 王 アフヌムサーフ・チャン・キニチ Ajnumsaaj Chan K'inich に命じられて建築されたことが記されている (Estrada-Belli and Tokovinine 2016 : 152-153, 161-163; Than 2013)。このことから、遅くとも 6 世紀終わり頃までには、ホルムルとナランホの王家は縁戚関係を結び、共にカーン王国に服属していたことがわかる。では、ホルムルのカーン王国への従属はいつ頃から始まったのであろうか。アフヌムサーフ・チャン・キニチは娘をホルムルの支配者 ツァフブ・チャン・ヨパート Tzahb Chan Yopaat に嫁がせたのだが、後者が葬られたと推測される墓所のある建物に 7 キップ 14 チェン Ch'en (558 年 9 月 13 日) という日付が記されている。この日付が彼の生涯での重要な出来事に関連していることは間違いない。もしそれが即位の日であるとすると、ホルムルがカーン王国の傘下に入っていた時期は 6 世紀半ばに遡ることになる。

6 世紀半ばは、低地南部マヤ社会の勢力分布を考える上で極めて重要な時期である。なぜなら、

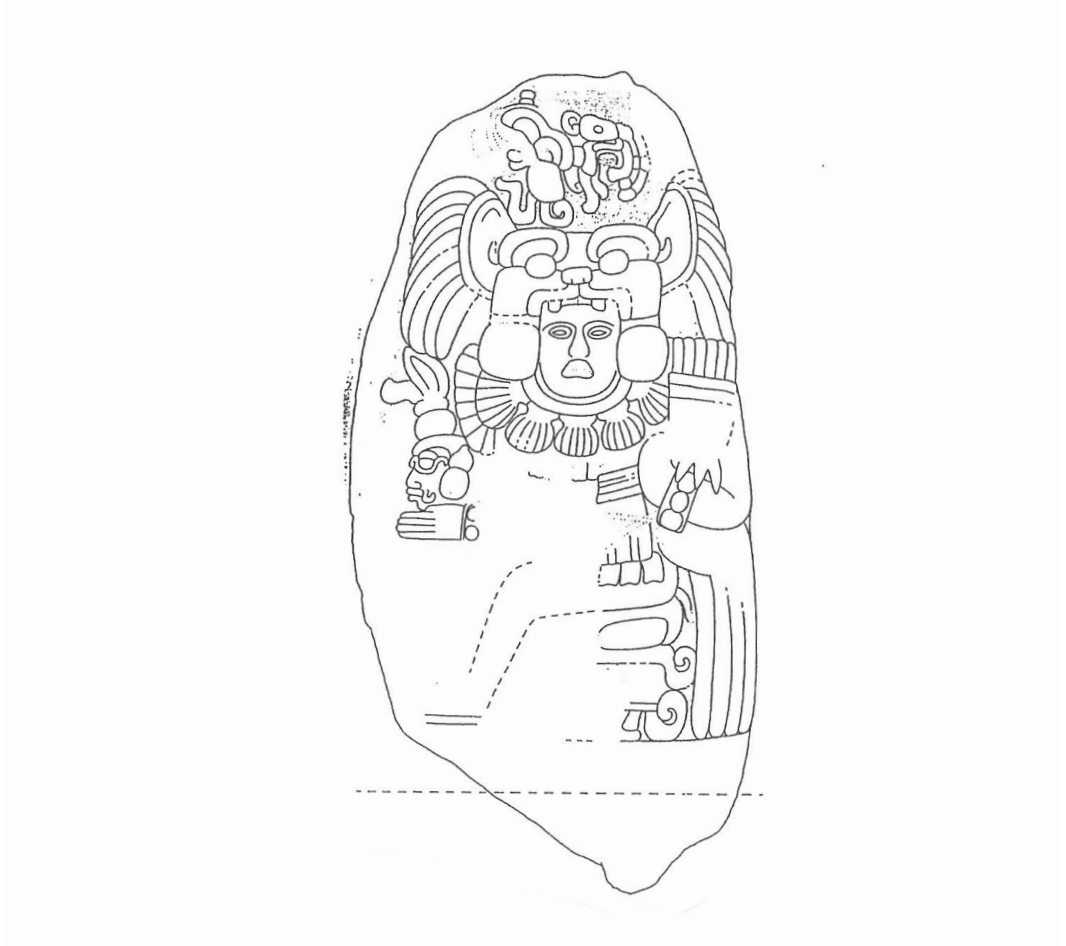


図8 ティカルの石碑4（Stuart 2000 Fig. 15.6より）

カラコルCaracolの祭壇21のテキストによると、それまで同地域で最大勢力であったティカルが、9.6.8.4.2 7イックIk 0シップZip (562年4月29日)にカーン王国を盟主とする勢力に大敗したからである(Martin and Grube 2008: 39, 89-90, 104)。これを契機にティカルの勢力は一気に失墜し、ティカルは向後130年にも及ぶ「暗黒時代」に入ることになる。それとは対照的に、カーン王国が低地南部マヤ地域の覇権を握るべく勢力を伸張していく。

カーン王国の南下政策は、6世紀前半には既に始まっている。ラ・コロナLa Coronaのパネル6には、カーン王国の王女が9.4.5.6.16 12キップ 9パシュ Pax (520年2月3日)にラ・コロナの王に嫁いだことが記されている(Barrientos y Canuto 2009: 24, 31, 36; Stuart et al. 2014: 436)。この婚姻は、カーン王国がマヤ高地との交易の拠点となるカンクエンCancuenへと至るルートを確認するために行った政略結婚であったことは容易に想像できる(図9)(Barrientos y Canuto 2009: 6; Canuto and Barrientos Q. 2013: 2-3)。

カンクエンを経由するルートは、「エントラダ」以降ティカル勢力が確保したものであり、その支配権を奪うことはティカルの利権を損なうことになる⁶。すなわち、カーン王国の南進の胎動は、ティカルを中心とする勢力への挑戦を意味する。そして、その時期がラ・スフリカーヤが放棄されて政権の拠点がホルムルに移る時期とほぼ重なるのは恐らく偶然ではない。そのことは、ホルムルの政権がカーン王国に服属していることでも明らかである。すなわち、ラ・スフリカーヤからホルムルへの権力の座の移動は、ティカルの先行きに陰りが生じ始めていたことと連動していると考えられるのである。

5、おわりに

4世紀後半、ティカルで生じた「エントラダ」を契機に、直接的ではないにせよテオティワカンの影響を受けた「新体制New Order」が確立する。「エントラダ」の余波は低地南部マヤ地域に広がり、コパンを始めとして各地で新たな政権が生まれる。この「新体制」の中心にあったのがティカルであった。

潮目が変わるのは、遅くとも6世紀に入ってからである。520年にラ・コロナと姻戚関係を結んだのを端緒として、カーン王国はホルムル、エル・ソツツEl Zotz、エル・ペルー El Perúなどティカル周辺の国々を次々と服属させていき、包囲網を形成する(図1)(Estrada-Belli and Tokovinine 2016: 163-164)。とりわけエル・ペルーはシフヤフ・カフクがティカルに到着する8日前に立ち寄った都市であり、長くティカルと結んでいた国である(Freidel y Escobedo 2004: 412; Freidel et al. 2007: 193-194; Guenter 2005: 366; Martin and Grube 2008: 29)。従って、562年のカーン王国の圧倒的な勝利は、周到な準備に基づく必然的な帰結だったと言えるであろう。こうして、「エ

⁶ パシオン川流域に位置するトレス・イスラスTres Islasの石碑3に描かれたテオティワカン戦士風の肖像は、ティカルの石碑31や石碑4のヤシュ・ヌーン・アヒーン1世を想起させる。この石碑に刻まれた日付は8.18.4.4.0 11アハウ 8ヤシュキン(400年9月3日)と考えられている(Tomasic y Fahsen 2004: 800-802)。従って、この石碑の建立も「エントラダ」の余波と解釈できる。

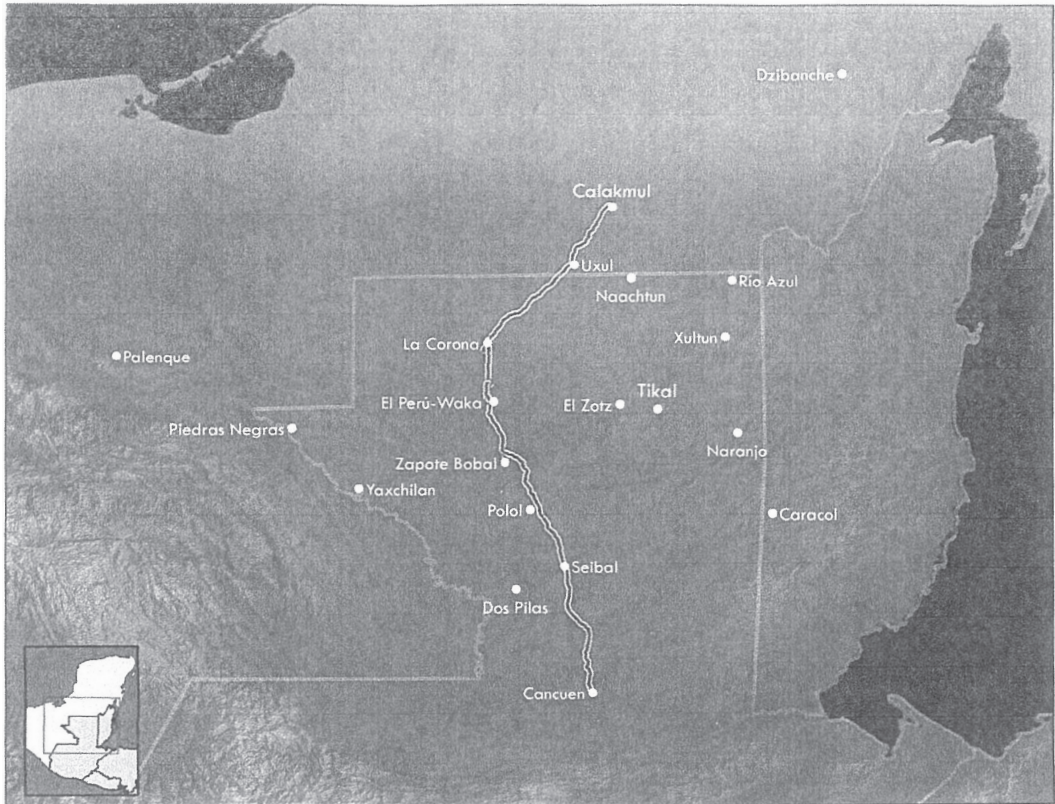


図9 カーン王国の想定交易ルート（Canuto and Barrientos Q. 2013 Figure 1 より）

ントラーダ」以来続いたティカル主導の「新体制」は終わり、代わってカーン王国が覇権的国家として勢力を拡大する時代が到来する。「エントラーダ」に伴って生じたラ・スフリカーヤの政権が、「新体制」終焉と共に崩壊したのも、当然の帰結であった。ホルムルーラ・エントラーダは、ティカルやカーン王国の首都カラクムルとは比べ物にならない小都市である。しかし、そこにも時代の趨勢を反映する痕跡が残されているのである。

引用文献

佐藤孝裕

2004 「11EbのEntrada—A.D.378のティカルの政変—」『史学論叢』第34号、26-54頁。

2005 「キニチ・ヤシュ・クック・モのコパン建国とテオティワカン」『マヤとインカ 王権の成立と展開』75-92頁、同成社。

Barrientos, Tomás y Marcello Canuto

2009 Proyecto regional arqueológico La Corona : objetivos, métodos y antecedentes de la temporada de campo 2008. En *Proyecto Arqueológico La Corona, informe final, Temporada 2008* (Marcello A. Canuto y Tomás Barrientos, eds.): 1-20, Guatemala.

Canuto, Marcello A. and Tomás Barrientos Q.

2013 The Importance of La Corona. *La Corona Notes* 1 (1). Electronic document,

<http://www.mesoweb.com/LaCorona/LaCoronaNotes01.pdf>

Estrada-Belli, Francisco

2011 *The First Maya Civilization : Ritual and Power before the Classic Period*. Routledge, New York.

Estrada-Belli, Francisco, Alexandre Tokovinine, Jennifer M. Foley, Heather Hurst, Gene A. Ware, David Stuart, and Nikolai Grube

2009 A Maya Palace at Holmul, Peten, Guatemala and the Teotihuacan “Entrada” : Evidence from Murals 7 and 9. *Latin American Antiquity*, 20(2), 228-259.

Estrada-Belli, Francisco, and Alexandre Tokovinine

2016 A King’s Apotheosis : Iconography, Text, and Politics from a Classic Maya Temple at Holmul. *Latin American Antiquity*, 27(2), 149-168.

Foley, Jennifer

2007 Correlating Archaeological and Epigraphic Evidence at La Sufricaya, Holmul, Péten. Electronic document,

<http://www.famsi.org/reports/05059/05059Foley01.pdf#search=%27la+sufricaya%27>

Freidel, David y Hector L. Escobedo

2004 Síntesis de la primera temporada de campo del proyecto arqueológico de El Perú-Waka’ . In *Proyecto Arqueológico El Perú-Waka’. Informe No.1, Temporada 2003*, (Héctor L. Escobedo y David Freidel,

eds.) : 409-420, Universidad Metodista del Sur, Dallas.

Freidel, David, Héctor L. Escobedo, and Stanley P. Guenter

2007 A Crossroads of Conquerors : Waka' and Gordon Willey's "Rehearsal for the Collapse" Hypothesis. In *Gordon Willey and American Archaeology* (Jeremy A. Sabloff and William L. Fash, eds.) : 187-208, University of Oklahoma Press, Norman.

Guenter, Stanley Paul

2005 Informe preliminar de la epigrafía de El Perú. En *Proyecto Arqueológico El Perú-Waka': Informe No. 2, Temporada 2004*, (Hector L. Escobedo y David Freidel, eds.) : 359-398, Universidad Metodista del Sur, Dallas.

Hansen, Richard D. and Stanley P. Guenter

2005 Early Social Complexity and Kingship in the Mirador Basin. In *Lords of Creation : The Origins of Sacred Maya Kingship* (Fields, Virginia M. and Dorie Reents-Budet, eds.) : 60-61, Los Angeles County Museum of Art, Los Angeles.

Harrison, Peter D.

1999 *The Lords of Tikal : Rulers of an Ancient Maya City*. Thames and Hudson Ltd, London.

Marcus, Joyce

1983 Lowland Maya Archaeology at the Crossroads. *American Antiquity*, vol. 48, no. 3, 454-488.

Martin, Simon and Nikolai Grube

2008 *Chronicle of the Maya Kings and Queens : Deciphering the Dynasties of the Ancient Maya*. Thames and Hudson Ltd, London.

Miller, Mary and Karl Taube

1993 *An Illustrated Dictionary of the Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*. Thames and Hudson Ltd, London.

Stuart, David

2000 "The Arrival of Strangers : Teotihuacan and Tollan in Classic Maya History. In *Mesoamerica's Classic Heritage : From Teotihuacan to the Aztecs* (David Carrasco, Lindsay Jones and Scott Sessions, eds.) : 465-513. University Press of Colorado, Boulder

Stuart, David, Peter Mathews, Marcello Canuto, Tomás Barrientos Q., Stanley Guenter, y Joanne Baron

2014 Un esquema de la historia y epigrafía de La Corona. En *XXVII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala 2013, Tomo I* (Bárbara Arroyo, H. Escobedo, y H. Mejía eds.) : 794-809. Ministerio de Cultura y Deportes, Instituto de Arqueología e Historia, Asociación Tikal.

Than, Ker

2013 Giant Maya Carvings Found in Guatemala. Electronic document, <http://news.>

nationalgeographic.com/2013/08/pictures/130807-maya-frieze-discovered-holmul-guatemala-archaeology/, accessed August 7, 2013.

Tokovinine, Alexandre

2008 *The Power of Place : Political Landscape and Identity in Classic Maya Inscriptions, Imagery, and Architecture*. PhD Thesis, Harvard University, Cambridge, MA.

Tokovinine, Alexandre, and Francisco Estrada-Belli

2015 *La Sufricaya : A Place in Classic Maya Politics*. In *Classic Maya Politics of the Southern Lowlands : Integration, Interaction, Dissolution* (Damien B. Marken and James L. Fitzsimmons, eds.) : 195-223.

University Press of Colorado, Boulder.

Tomasic, John y Federico Fahsen

2004 *Exploraciones y excavaciones preliminares en Tres Islas, Péten*. En *XVII Simposio de Investigaciones Arqueológicas en Guatemala 2003 (J.P. Laporte, B. Arroyo, Luis Méndez Salinas, y Andrea Rojas, eds.)* : 435-448. Museo Nacional de Arqueología y Etnología, Guatemala.